

2024年3月29日 第一回「もう一つのABC」のまとめ

<事前に決めたメインピックス>

- ・美と利
- ・信仰と宗教

「いつも汚れた海を泳いでいると…

その水が汚れていることに気が付かなくなる」

(2013. 9. 4. 木下 HP イントロエッセイより)



気づくことに鈍感になっている日常。

考えること、議論することで、少しでも自分の感覚を磨いていきたい。

以下は、当日木下先生が話されたことを、自ら整理・要約していただきました。

・信仰と宗教—あるいは信じることと信仰すること

木下曰、「現在の木下は、キリスト教も仏教も、もちろんイスラムも神道も、教会という組織が用意している教えにはすべて疑問を感じている。つまり、どんな信仰も信じていない。だからと言って唯物論者でもない。信じていないということだけ信じている。現在の人間の智慧では説明出来ない大きな力がこの世界を動かしているかもしれないことを否定もしない。それをいま持っている能力で断定して解った振りをした言葉には強い疑問を感じる。

だから、信仰の問題で他者（ひと）を傷つけ合うことは許せないとも思っている。そういう個の信仰を信じている人を責めもしない。人間はそれぞれ自分なりの「信」じていることがあって当然だ、その上で助け合って生きていきたい、そういう生きかたを支える言葉（概念）があるとすれば、それが<美>だと考えている。

個人個人自分の信じる信仰はあっていいが、それを保証する制度を創作して個人の思考と行動を制限しているのがすべての宗教団体だ。人類の歴史がそれを物語っている。そして哀しいことに、自分の「信」をそんな宗派に保証してもらいたいといつも願っているのが人間の本能に近い習性だ。個は共同幻想に身を寄せたいと願っている。共同幻想に個を奉仕出来たときに無限の喜びを感じる。それはなぜか。現存する共同幻想としての宗教がほんとうに個を救うありかたを実現することは出来るのだろうか。人類史を見渡してもそんな例はないのではないか、異なる宗派を悪とみなして殺人さえ平気でしてきたのが各宗派の歴史である。それはなぜか、ではどうすればいいか、それを問いかけているのがいまのボクだと言ってもいいかもしれない。—この問題にはわりと早くから気づいていたようです」

・木下先生の history

「幼い時に罹ったポリオの後遺症で4年生以降は小学校に通えなくなり、その後の義務教育は受けていない。15、6歳の頃自分の将来を考えて、脚を使わなくても生きていける道を探そうと、大学入学資格検定試験を受けるため予備校に通って勉強した。家に入出入りする青年と近所の年上の友達が助けてくれた。青年は勉強の仕方を教えてくれ、同時に無教会派のキリスト教信仰の道も拓いてくれた。近所の男の子からは、美術や音楽の世界への興味を育ててもらった。ラジオ番組「音楽の泉」（当時の初代解説者は堀内敬三氏）を毎朝聞いていた。」

※木下先生の history を詳しく知りたい方は、HP「ABCの部屋」にて、宇治郷毅さんによる「木下長

宏」紹介をご参照ください。

「万全の準備をして大検を受けようと、京都市の教育委員に電話をしたら、大検は中学を卒業して高卒の資格のない人のための試験なので、ボクには受験資格がない小学5年からやりなおせ、と言うだけ。その時向学心に燃える18歳の青年は、ほんとうにがっかりしてしまった。と同時に役人というのがまったく嫌いになった。そして、組織（共同幻想体）に属していることによって人間はどんなにでも非情になれるのだということを教わった。

大学には、さきほどの勉強を見てくれた青年が大学独自に入学資格認定試験を実施しているところがあるから探してご覧と教えてくれて、翌年の春京都外国語短期大学の入学試験を受けることが出来、そのあと勉強するしか身の立てようはないと思い、人間にとって表現するということはどういうことか研究したいと、それには神学だと勝手に思い込み、同志社大学神学部を受験しようとしたが、神学部は教会の牧師の推薦状が要るとのこと。ここでも、組織が個人の自由な願いを阻む経験をさせられた。それなら、と美学美術史専攻に受験、晴れて大学生になった。そこで、将来を約束されて博士課程（現在の後期課程）に進級。その年全共闘運動が全国を席卷、立場上もあつたし、全共闘の主張もよく理解できたので、勉強する場を失ったヘルメット学生を自宅に呼んで勉強会を開いた。そうしたら、指導教授はそんなボクを暴力学生の一員とみなし、将来の約束は反故にすると宣告された。ここでまた、組織は人間を非情にすることを身に沁みて教えられた。その後、運良く創立の準備をしている京都芸術短期大学の教員に拾われるまで、予備校の先生や雑文書きやいるんなことをして糊口を凌いできたものだ。大学教員への道を遮断されたとき、同時に教会学校の教師の場を失った。無教会派は洗礼制度を否定しているので、洗礼をしてない（する気がない）者に信徒の子女を預けることは出来ない、という理由だった。ここでもまた、組織という共同幻想体が人間を傷つける場面を経験させられた。」

・世界の歴史を眺めると、個としての信仰に篤いが教会の組織とは別の場面でその信仰に忠実に生きている人がたくさんいる。シュヴァイツァー（1875～1965）もその一人。

・日本の神道と仏教について

「神道が独立するのは明治維新以降のこと。それまでは平安時代の延喜式で定められ神仏混淆本地垂迹思想で固められており、幕末に本居宣長や平田篤胤らによって神仏分離運動の基礎が用意された。幕末には、天理教や大本教など強力な新興宗教（一種の神道）がたくさん起こった。現在の神道が国家宗教のように扱われるのは、明治維新政府の恣意的選択の結果だと言ってよい。」「ボク自身はどの宗派の信仰にも疑問を持っていると言ったけど、日本列島の歴史的風土のなかで育ったので、なにげない行動にふと仏教的な発想がそこにあるなと感じることがよくある。」

<第一回「もう一つのABC」で決まったこと>

・会費について

支払い例をあげて説明させていただきます。

ある月の例

- ①：「土曜の午後のABC」のみ参加 ¥2,000-
②：「もう一つのABC」のみ参加 ¥2,000-
③：「土曜の午後のABC」 + 「もう一つのABC」両方参加
 ¥2,000- + ¥1,000- = ¥3,000-

以上

まとめ：味園実和